

2025 ソニー幼児教育支援プログラム

「科学する心を育てる」

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

「アートが科学に？」

～幼稚園は自遊空間！1枚の絵から始まった科学～



芦屋市立宮川幼稚園

目次

はじめに

I 実践にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

II 「科学する心の構造図」・・・・・・・・・・・・・・ 2

III アートが科学に？1枚に絵から始まった科学・・・・・・・・ 3

科学する心の芽生え

実践1 ドライブに連れて行って・・・・・・・・・・・・・・ 6

実践2 夜の道を作りたい・・・・・・・・・・・・・・ 7

実践3 秘密の場所！光遊びが5歳児先生の授業に！・・・・ 9

実践4 月はいくつあるの？・・・・・・・・・・・・・・ 12

成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

IV 実践から「科学する心の構造図の検証」・・・・・・・・・・ 15

おわりに

『科学する心を育てる』

～豊かな感性と創造性の芽生えを育む～

はじめに

本園は、『科学する心』の視点での研究において4年目を迎える。

職員はいい意味で楽観的で「子どもは本来主体的なもの」「自己肯定感や他者を愛でる思いやりはもっている」「何か困難なことに出会ったときでも乗り越えていく力を秘めている」という3つの視点で捉えている。ゆえに昨年度までの研究の中で「変容」というよりも「子ども本来の力が発揮できるように」というところで留まっていた。

そこで、今年度は芦屋の教育指針の肝でもある～Ashiya P・E・A・C・Eプロジェクト～One! Step 夢中になって学ぶ楽しさを～の具体化と、園のテーマである「自ら学びのびやかに学ぶ幼児の育成」に向かって、安心できる環境や保育者の存在について話し合った。遊びが学びにかかわっていくには仕掛けていく環境と、保育者や周りの大人が共に心を動かすことが必須である。子どもと共に保育者も自分で考え、決め、行動し、振り返ったことをどう生かしていくのかを積み重ねていった。

今年度の4月から7月の3か月半、4歳児は安心する、好きになる、夢中になる、試す、継続する、満足する保育を心がけてきた。5歳児は昨年の経験をもとに人、環境、事象と対話や葛藤を重ね学べるよう、保育者も自らの考えをもって、子どもの発想と融合できるような仕掛けを考えた。また、保育の振り返りと今後の展開への期待を毎日保護者に伝えることで、家庭が共に子ども達の「学びたい気持ち」をくすぐる存在へとかわってきた。

実践の中でも表記するが、保護者からは「楽しい！私の自由研究みたい」「実は、我が家では一人一個手作りのプラネタリウムがあるんです」「ろ過装置の作り方調べてみました」等、子どもが幼稚園で興味・関心をもったことを共に面白がり、目をきらきらさせながら協力してくれる頼もしい味方。本当にありがたい存在である。

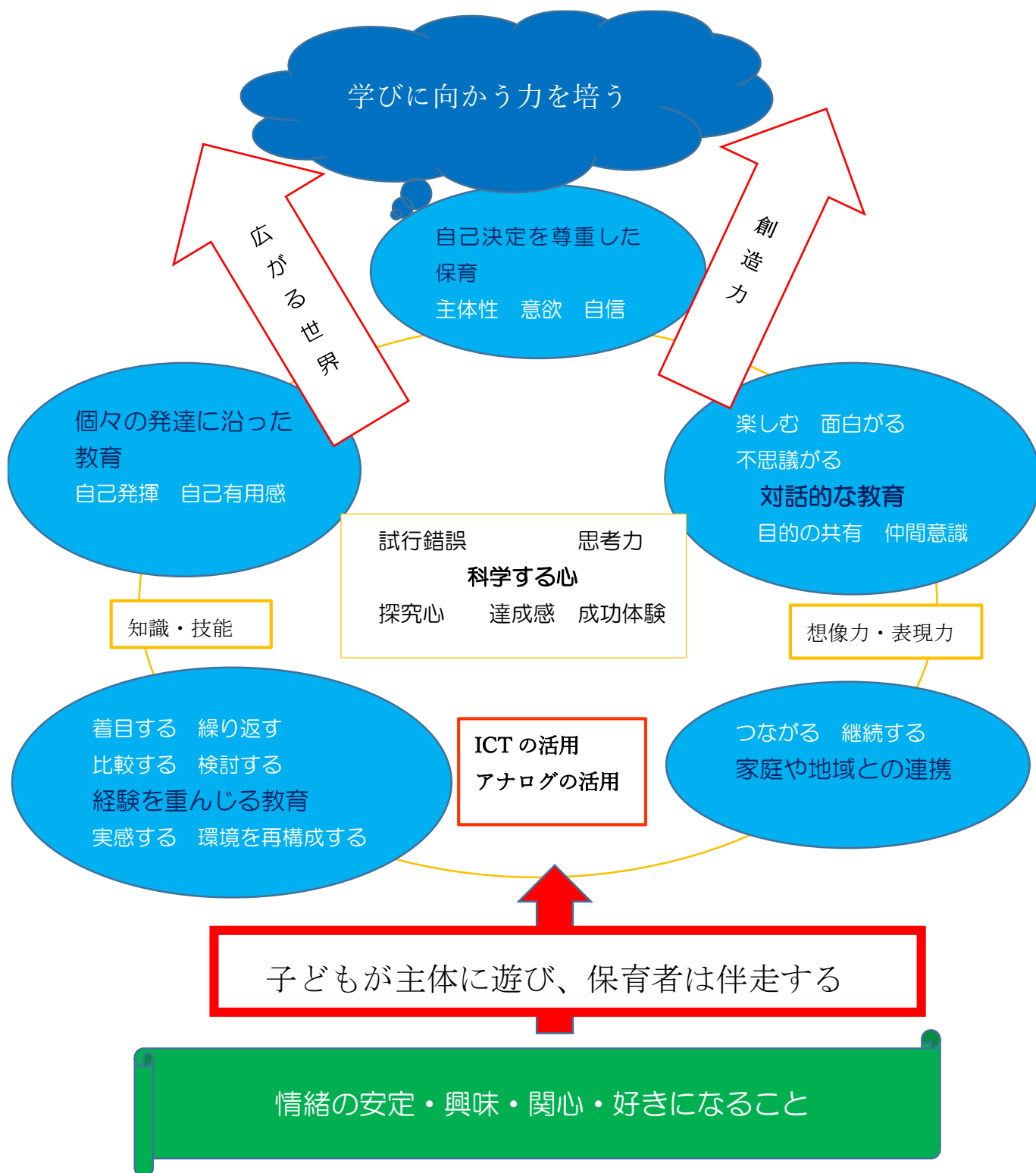
園児は総勢18名と少人数である。「刺激が少なく子ども達の育ち合いは保障できるのか」ということを問われたこともある。私たちは綿密に仕組みられた環境の中、自由感あふれる保育を展開するために園、家庭、地域が一丸となって未来を切り拓き学び続ける心の育成に努めている途上である。そして、今手応えを感じている。とくに今年度は子どもの変容というところだけでなく、職員の変容も見られるようになってきた。子どもの見取り方が「～と思っている」から「こんな力が芽生えている」になった。

それぞれの力を信じ、深化させ「科学する心を育てる」ための種まきが芽吹いていることを実感している。未来に続く可能性を3か月半の保育から振り返り、循環していけば、対話が広がり幸せな学びの場になっていくと確信している。

I 実践にあたって

- ① 安心できる居場所があることで環境や事象に心をときめかせかかわっていく。
- ② かかわりの中で個々が「どの部分に焦点を合わせているのか」「どんな力をつけていこうとしているのか」を保育者が理解し、満足感や安心して失敗できる環境を仕組んでいく。
- ③ AI機能の進化により便利なが子どもを削いでいることがある。実体験を中心にタブレット等の機器を対話する道具として捉え「科学する心への芽生え、欲求」を育てていく。

Ⅱ「科学する心の構造図」



Ⅲ アートが科学に？ 1 枚の絵から始まった科学

年度当初、園舎の西端の保育室を見直し、簡単な運動用具があった保育室を幼児の心をくすぐる環境に構成した。

子どもが自由に造形活動ができるように配置を考え、進級、入園当初の子どもの手にあうように画材をはじめ、ダンボール類、木切れ、布、廃材等を置いておいた。絵具に関しては色を皿に出しておき、長いロール紙を部屋の真ん中に敷き、絵具を何滴かたらししておいた。また、作品を照らすことができるように OHP 機器もおいておいた。

当初は、ダンボールカッターでダンボールを切る、ロール紙に思いのまま、ローラーで様々な色を着色する、手に絵具をつけて手形をつける等、心が動くきっかけをつくるのが目的だった。

実践事例 1 「ドライブに連れて行って！」

姉が通っていた幼稚園に入園したいと思っていた A 児。「ほんとはこの幼稚園じゃないところに行きたかったんだ」のつぶやきに担任は、A 児にとって「大好きな居場所」になるように A 児の内面を探りながら、意欲に火をつけていこうと日々環境への仕掛けをしていた。

4 歳児 4 月	場所	保育室 → 園舎
当初のねらい「自分だけのクレヨンとの出会いを楽しむ」 内容 車が走る道を自分のクレヨンで線描きをする		
太字は援助 4 歳児が自分のクレヨンと出合う日。保育室で「車でドライブ」と名付けて四つ切の画用紙の上でクレヨン遊びが始まった。 線描きの道にとどまらず、サクラ並木や道路の車線を描いている A 児。園長が通りかかり、「サクラ見ながらドライブ！私も連れて行ってほしいわ」と声かけをすると「画用紙が足りない。もう一枚くっつける！」と継ぎ足していった。他の子どもにも広まっていき、一日で完結できなかった。		読みとり 線遊び、色遊びを楽しもうというねらいを超えて「経験したこと」を描いている。 入園してまだ 1 週間。子ども達の集中する時間は 15 分程度ということをもって活動を始めたが嬉しい誤算。とくに A 児ははじめての集団生活であるのにこんなにも自分の思いを出すことに一所懸命で主体的である。そして、少人数ということが思いを伝染しやすくしている。 「子どもはそもそも主体的」という楽観的なところでとどめておいてよいのか、「柔軟に対応」という先生の感性的なところで終わらせておいてよいのかということがこの日の職員会で話し合われた。 「どんな力を育てたいのか」「どんな力が育ったのか」というところをはっきりとをもって環境の構成、振り返り、環境の再構成をして楽しいが力になっていく循環する保育をめざすことを確認し合えた。 子どもの変容ならぬ、先生たちの変容の第一歩にもなる。常に子どもと共に！！



活動がダイナミックになるように、保育室ではなく、アートの部屋の壁に作品を貼っておく。

登園後、保護者が保育室を覗きにくる。A児が「昨日の絵がない」と呟く。

「アートの部屋に貼っておいたわよ。後で行こうね」と声をかけると「まだ、続きがあるのに」「続きができるようにアートの部屋に貼っておいたから」と言い直す。「飾っても続きしていいんや。やったあ」

画面だけにはおさまらなかったことで、壁に作品をはり、続きの道を床に作れるように場を設定した。すると床にペタペタと画用紙やダンボールの切れ端を養生テープで貼っていく。自分の絵から出てきた道が友達と交わることが楽しく、「もっとつなげよう」「カーブにしたい」「細い道になるな」と声をかけあってつないでいっていた。



すると5歳児が「え？それ、道？楽しそうだね。手伝おうか」4歳児「手伝わせてあげる」と道がどんどんつながっていくことになる。5歳児はダンボールやカッターを棚から出して、得意になっていい塩梅に切り始める。それを見た4歳児もやり方を教えてもらい、なんとかダンボールカッターを使い、道にする。木切れもつなげての大作。

目標は4歳児の部屋まで車が走れる道にすること。いっきに5歳児と4歳児の心の距離が縮まった。

ひとしきり遊んだ後今後についてを話し合う。「道だけじゃなくって本物の車があったらいいんじゃないかな」とアイデアがでてくる。「外で使っているあの車とかさ！」「でも種類が違う気がする」「種類が違ってどういうこと？」「外の車は固いでしょ」「僕らの道は柔らかいからデザインができるやん」

すると次の日、大きなダンボール箱をもってきたA児。

「何に使うの？」「僕が乗る車だよ」近くにいる4, 5人を集めて話すA児。道づくりの続きをしながら車づくりを楽しんでい

A児は昨日「満足」して帰ったのだろう。そして、保護者にも自分の作品の過程を見てもらいたかったにちがいない。「壁に貼る」＝「完成」という概念があるようだ。

幼稚園は、自遊（由）空間であることを体験している。

個々の作品が仲間との協同作品にかかわっていくことで、友達との対話が遊びながらできている。



わくわくとしながら作っていることや同じ空間にすることで5歳児の気持ちも揺さぶられる。

遊び始めたのは4歳児であることから、言葉を選んで聞いている5歳児。1年の成長を感じる。様々な用具を使いこなすことから、大人には主導権が5歳児に移っているようにみえるが、新しい道具を使っていることや、自分の絵が画用紙から飛び出て園がキャンパスになっている嬉しさと4歳児は喜々として取り組んでいる。さらに「自分たちの部屋までつながる」という目標が心を躍らせている。

外の車がプラスチックでできていることから「素材」についても気がついている。車で走りたいという目標の前に「工夫して作りたい」ということや「道具を使う楽しさ」も感じている。

幼稚園での生活と家庭がつながっている。

遊びながら自分で目標を見つけ、友達とも共有している。

平面から始まった絵が遊びながら立体になっていく。ダンボールは立てることが難し

る。さらに、信号機、トンネルが必要だと信号をたてるための道具を探す。最初は切った細いダンボールを信号機に取り付けて「よし完成」と床に貼り付けようとする。「くにくにくにやして立たない」と言いながらダンボールを何枚も何枚も重ねていく。「なんで、重ねるの？」と保育者が尋ねると「固くするねん。筋肉って固いから強い」「固かったら強いんだ」「え！大発見やん」「知ってたし」

結局、うまくいかず5歳児のクラスの前にあったクラス表示を見つける。「これでいいかな」「もともと立ってるし」「早く進みたいしな」「頑張ってもこんなに固くならんし」と言いながら、信号機を貼り付けて、車に乗って出発。

2階に続く階段をトンネルに見立てて、階段にまで道がついていった。



い素材であることにも経験しながらつかんでいっている。

重ねると固く強くなるということは作りながら実感しているようにみえた。材料と対話している。子どもの「筋肉＝固い」という知識からでた例えかたが面白い。

4歳児4月、これ以上時間をかけてダンボールの信号にこだわるのは遊びと気持ちが途切れてしまうと思い、見守る。

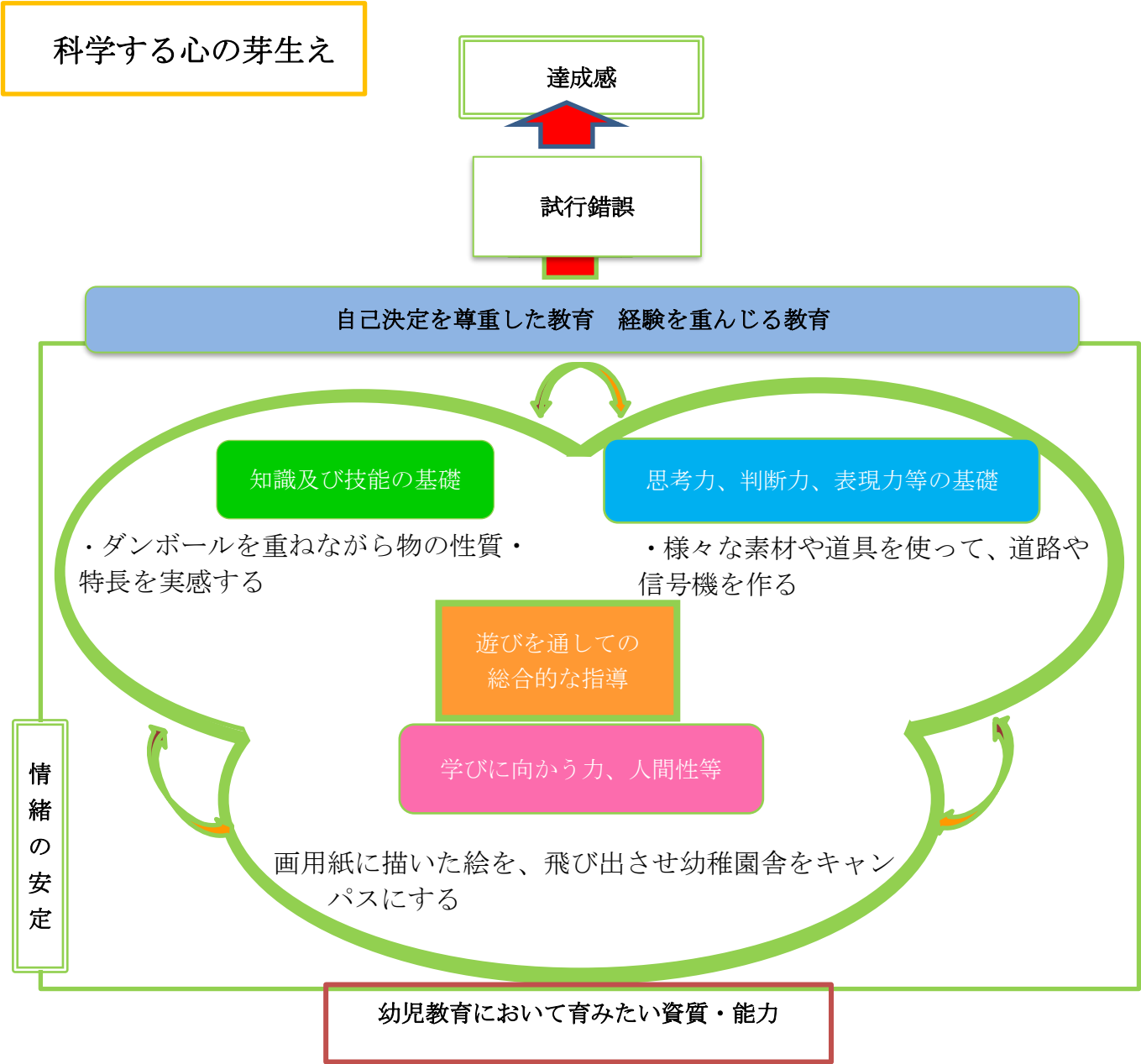
入園して2週間。幼稚園内の環境をこのドライブで知って知っている。



要因を探る

- ・画用紙だけでは、子どもの溢れる思いが表現しきれないと判断し、クラスの保育室から様々な素材が準備されているアートの部屋の壁に貼ったことが、ダイナミックさ、自分、人や物との対話、試行錯誤が生まれた。
- ・この遊びから一般的な発達段階にとらわれず、子どもの内面を理解することが次への手立てへとつながる。





実践事例 2 夜の道を走りたい

4 歳児	5 月	場所	アートの部屋→中廊下
ねらい	5 歳児	プラネタリウムの星が光るように友達と考えを出し合って取り組む	
	4 歳児	5 歳児の刺激を受けながらドライブ遊びを楽しむ	
内容	5 歳児	暗くするためのアイテムを使って、はっきりと星が輝く方法を考えていく	
	4 歳児	光の遊びをドライブ遊びに取り入れ、よりイメージを広げて遊べるようにする	

太字は援助

アートの部屋での 5 歳児の主活動は B 児がおじいちゃんからプレゼントしてもらった手作りのプラネタリウム装置で星を映すことである。OHP があれば映るというものでもないことに気づいた子ども達は部屋を暗くするために奮闘している。新聞紙を貼ったり、ついたてを置いたりしているグループ。そこに保護者の力と思いもくわわり、自宅から家電のダンボールやカーテン、ソファカバーをもってくるという一大プロジェクトになっていた。保育室の一角にテント（プラネタリウム）がふたつ張られた。

（お父さんが大きなダンボールを担いでもってきている写真をとれなかったのが園長の反省点である）



箱を家からもってきて、穴をあけて見よう見まねでプラネタリウム装置をつくっている子どもが日に日に増えていった。また、白い天板の机を箱と布で囲み、眼圧検査装置のようなプラネタリウム劇場を作っている子もいた。



ライトは家から持参してくる子が日に日に増えた。

アートの部屋で 5 歳児がつくっているプラネタリウムの傍らで絵から飛び出てきた車を走らす道路づくりに励んでいる 4 歳児。

読みとり

プラネタリウムづくりという確かな目標をもって試行錯誤している。

空間を自分たちでデザインすることが楽しいと感じている。

暗くすると光が映し出されるということを遊びながら学んでいる。

新聞紙を窓に貼っていくことが遊びになる。これも目的があるからこそ。

子どもを真ん中に据えて、「学びのためなら」と協力してくださる家庭に感謝。

幼稚園と家庭の循環が子どものやる気を盛り上げている。



B 児祖父作



5 歳児作

みんなでひとつのプラネタリウムを作ることが「協同」になると考えていたが、テーマは同じで個人の思いを実現することが深く学べるのではないか。

（個別最適化の学び）

大きな部屋を暗くする、大きな布でテントを作ることにも最初は参加していたが、自分の手にあったもので作ることにかえている。布ではなく、板という素材の違いが功を奏したことには気づいていない。

5 歳児が近隣の図書館に出掛けることになり、その場から離れていった。すると、道路づくりをやめて OHP 機器や懐中電灯の光を白い布や壁に 5 歳児の見よう見まねで映し始める。セロファンや包装用のシート・・・とにかくそこにあるものを使って光遊びを胆嚢している。



A 児が「マジックです。僕が光をスイッチを押さずに消してみましょ」と言いながら光の前に大の字に立ちはだかる。「消えてへんやん。それ、影やん」とみんなで大笑い。「宮川幼稚園は朝やけど夜にもなるから、夜の遊びもできるなあ」「あ！いいこと考えた。この車、夜にも走れるようにライトつけよう」とライトの部分に懐中電灯を貼り付けようとする。「でも、これ大きい組さんのやから勝手につけたらあかんなあ」と言って一度はマジックでグルグルと描くが、「ライトやから、こんなんじゃ偽物」

少し間をあけて「このマジック大きい組さんのライトみたいや」と呟きながら紙コップに？マークのマジックを差し込み、セロファンでくるんで貼り付ける。「光らないやん」「だってペンやもん。仕方がない。家から持ってくるわ」「え、あるん」このやりとりを見て担任は準備していた懐中電灯を出さずに微笑んでいた。

この日の降園時、保護者に「今日の面白話」として伝えていた。次の日に車のライトが集まる。ぴったりのペンライトを選びダンボールカッターで車の前方に穴をあけ、セロファンでくるんだ紙コップをつっこみ、ガムテープで貼り付けて、車に取り付けた。

4 歳児は自分の車を走らせるための道路づくりをしながら、5 歳児がしていることを「面白そうだな」と思っていたのだ。



4 歳児だけになったことで、心をくすぐる空間や素材を存分に使い、光と影の原点である「光は直進しかしない」ということを遊びとして発見している。

実際に部屋が薄暗いことと 5 歳児が夜空を作りだそうとしていることをわかり、夜に結び付けている。

葛藤しながらもしていいこと、わるいことを判断している。

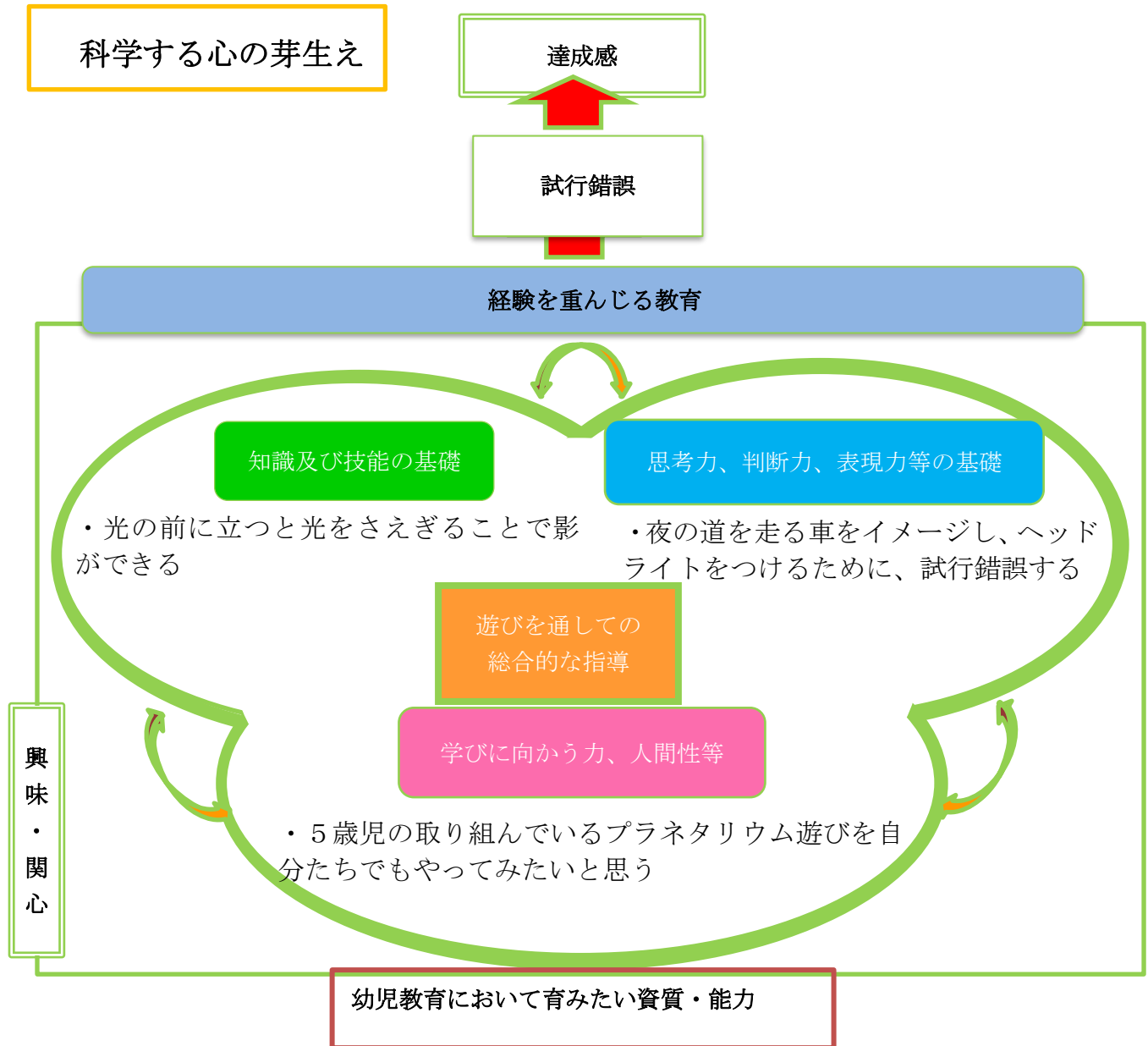


準備していた懐中電灯をあえて出さない担任が、子どもが「自分たちの力で」というところと、家庭をうまく巻き込むきっかけをつくっている。



要因を探る

- ・ 4歳児と5歳児が遊びの空間を共有していることで、「プラネタリウムづくり」という光や影を作り出す工夫をするという4歳児からすると高度なことを自分たちの遊びの中に部分的に取り入れようとするきっかけとなっている。
- ・ 車で夜の道を走るということを実現させるための、ライトというアイテムが不足していることで、試行錯誤し、家庭ともつながり、次の日の遊びへとつながっていく。



実践事例 3 秘密の場所！光遊びが5歳児先生の授業に！

今日もダンボールの車に乗って道路を走る4歳児。アートの部屋にある絵具とローラーで道にペイントしながら進んでいる。また、車のライトをつけながら進んでいくことで夜の街を進んでいる気になっている。家から持ってきたライトを手でもって照らすことも嬉しい。新たなルートや信号機を作る子、自由感にあふれている。2階に上がる道をトンネルと称しているのだが、階段の下にある非常口に続く道が気になっているようで「あそこのほうがトンネルやん。真っ暗やし」「緑の光がなんか怖いな」と自分達で見立てながらドキドキを楽しんでいる。

4 歳児 6 月～7 月	場所	アートの部屋→中廊下→階段下
当初のねらい「光の不思議を楽しむ」 内容 遊びに必要な素材をそろえ、光の反射を面白がったり不思議がったりする		
<div>太字は援助</div> <p>担任は非常口に続く道に大きなミラーと艶のあるコンパネをたてかけておく。</p> <p>ドライブでやってきた子どものライトが鏡に反射することに気付き、「わ、なんか光った。びっくりした」と車から降りてライトを鏡にあてたり、コンパネにあてたりをひとしきり楽しむ。階段下に片づけてあった大太鼓を見つけ、そこにも光をあてている。「ここ、秘密の場所な」「誰にも言ったらあかんで」</p> <p>次の日から、くすのきの部屋から 5 歳児がプラネタリウムづくりに使っていたセロファンやアルミホイル、銀のボール紙、マジックを自分たちで運びこんでくる。</p> <p>銀のボール紙を丸めてライトをあてながら自分の顔が 3 つできることにびっくりしたり、壁に色々な種類の紙やビニールを貼って光が反射することを楽しんだりする。</p> <p>「鏡に光をあてたら、もうひとつ光ができるやん」と何度も試している。</p> <p>「秘密の場所ってここ？」と 5 歳児 C 児がくる。「そうやで」「僕もこんなん好きやで。それで、僕、物知りやとか研究者むきって園長先生から言われるねん」「みんなのやっていることって反射っていうんだよ」</p> <p>そこへ園長が通りかかる。「あら、C 君。それ、授業できる？」「オッケー。じゃあ、地球儀と鏡がいるかな。白い大きなボードとペンもいる。ここは教室っぽくないから、ばらさんの部屋で」</p> <p>ホワイトボードに太陽から出る矢印と月をかき、「みんな、月って光っていると思う？」「光ってるよ」「違うんだよ。太陽が燃えている光が当たっているだけ。それが地球に届いているんだ」</p> <p>そして、鏡にライトをあて、ホワイトボードに映す。「ほら、こうやって鏡の光が届くでしょう。こういうこと。これ、反射」と圧巻の授業。5 歳児の担任がクラスの子どもを集めた。</p> <p>翌日このことに触発されて 5 歳児は地球について「僕達が立っているのはね、地球が</p>		
<div>援助・読みとり</div> <p>暗くて怖いという気持ちよりも、「不思議」「面白そう」という気持ちが上回っている。</p> <p>他にも光るものがないかと、試している。</p> <p>5 歳児と同じ空間で経験していたことで素材の特長をつかんでいる。</p>  <p>大勢の前でステップをしたり話をしたりすることに抵抗がある C 児であるが、これは得意分野である。堂々と話している姿がうれしい。</p> <p>これは、C 児の自己肯定感を確かなものにするいい機会と捉え、場を設定する。人数がしばられていることで話しやすいと、5 歳児には声をかけずにいた。C 児の堂々とアウトプットする様子にさらなる自信につながたいと思った。</p> 		

僕達の足をちゃんとつかまえながら廻っているからだよ」と日本に光を当てて、「これが昼間」「裏は夜」と地球儀を真ん中に実演しながら話している。

「そしてくるっと廻ると・・・」と地球儀を廻すと「え？海の水こぼれるやん」「ひっばっているから」「でも水やで」沈黙する。「こぼれてないのにはワケが絶対ある」

調べるという文化が根付いている子ども達は「遠心力」という言葉を導きだしてきた。ところが、いまひとつどういうことがわからないようである。

そのことを踏まえ、水遊びの時にバケツに水を入れて「魔法をお見せしましょう」と職員がくるくる回し始める。

「そういうことね」と次々と真似を始める子ども達。「水遊びが実験だね」とわく。



生活経験から傾けたり、さかさにしたりするとこぼれるということからでた発想である。

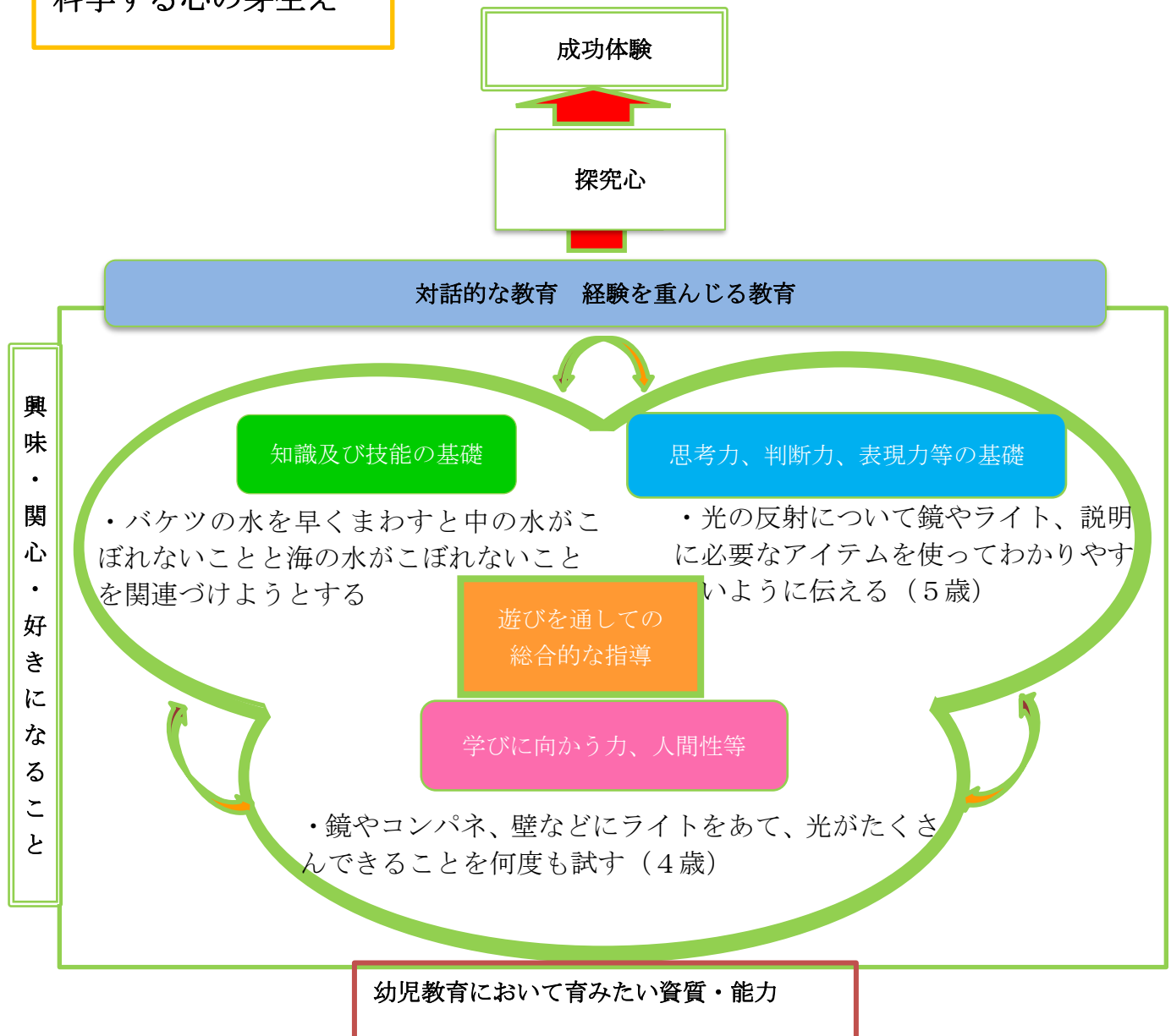


科学への興味・関心・探究心であふれている。保育者も一緒に楽しみむながら学んでいる。

要因を探る

- ・保育者が園舎のすべてを環境と捉え、子どもの次への学びとなる最適な場所に鏡やコンパネなどの環境を準備したことで、光の遊びの質が変わる。
- ・少人数だからこそ、子ども同士が刺激をうけやすく、学年を超えて遊びが交わる。モデルとなる5歳児がいるからこそ、4歳児は学ぶ意欲が高まっていく。
- ・年下の友達に教えてあげたい、自分の知識を伝えたいという思いが「大勢の場で表現することにつながった。
- ・地球儀を使って説明したことで、光と影、さらに引力についても話が及ぶ。「海の水がこぼれる」という発想に、さらに一歩踏み込み、遊びとして遠心力がおぼろげながら伝わった。

科学する心の芽生え



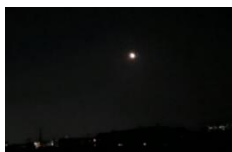
実践事例 ４ 月はいくつあるの？

５歳児の話聞いて、「月」に興味をもった子ども達。七夕とも重なり、保育者は夜空を見上げ、夢を広げることが願っていた。

４歳児は遊戯室の壁面の天の川の星を「星っていっぱいあるね」「寝ている時は後ろを向いているんだよ」「月はどこに貼ろう」「１０個いるもんね」「え？１個だよ」「違う３個」というなんともほのぼのしたこの会話から、学びが家庭にもつながっていった。

４歳児 ７月	場所	保育室 家庭
当初のねらい「夜空に興味をもつ」		
内容 月や星に興味をもち、夢を広げていく		
太字は援助 降園時、「月はいくつあるの？ということや月の形が話題になったことを保護者に伝える。保護者は微笑ましくその話を聞いていた。最後に担任が「今日の夜空を見上げてみてください。私もどんなお月様がでるかを楽しみに見上げます」と締めくくった。		読み取り この語りかけが、保護者も「見てみたい」と思うのだ。

次の日、望遠鏡を作ってきたA児「これでね、月を見たんだ。丸いもので見ても月は丸じゃないんだよ。それでお話も作ってきたんだ」とみんなの前でつくってきた絵本を見せながら話し始める。



月の数が3個だと主張していたA児は毎日、夜空を見て、母親のスマホで写真をとることが日課になってきた。

「私の自由研究みたい」とお母さんは笑顔で話す。そして、「次の満月は雨みたいです」と保護者同士で話している。

満月の日は嵐だった。園のブログにはA児の作ってきた絵本を載せた。

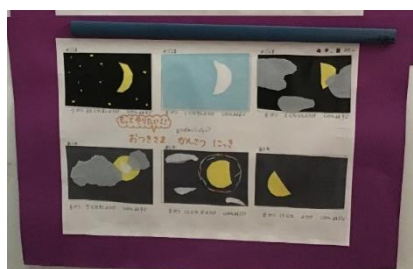
夜半に月が顔を見せたようだった。

次の日、「先生、昨日の月、写真をとったのでエアドロップしますね」と写真が5枚集まった。

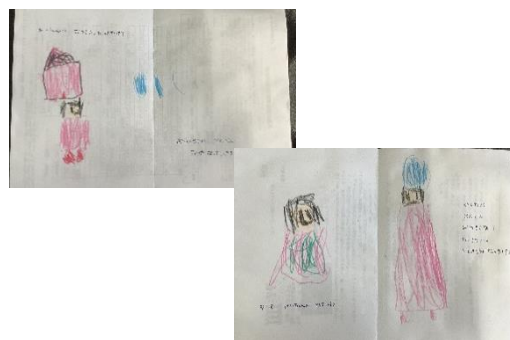
テレビ画面で月を見た後、展示しておく。

夏休みに預かり保育にきた「月が10個ある」と話していたD児のお母さんから、月の観察日記が届いた。

子どもの描いた絵に日付と「青い空にお月様がでていたよ」「月の中に犬が見えた」「月のまわりが虹みたいだった」さらに、お母さん作の切り絵が6日分添えられていた。



物づくりが楽しくなっている。それを支える家庭の力は大きい。



A児の描いてきた絵本の一部

子どもの活動を中心に対話している。幼稚園が拠点となり、家庭も学びの場になっていることが1学期の成果である。



空を見上げる、継続して変化を見る。4歳8月、今は月がいくつあっても、感性にからめたこの経験がきっと未来につながっていく。

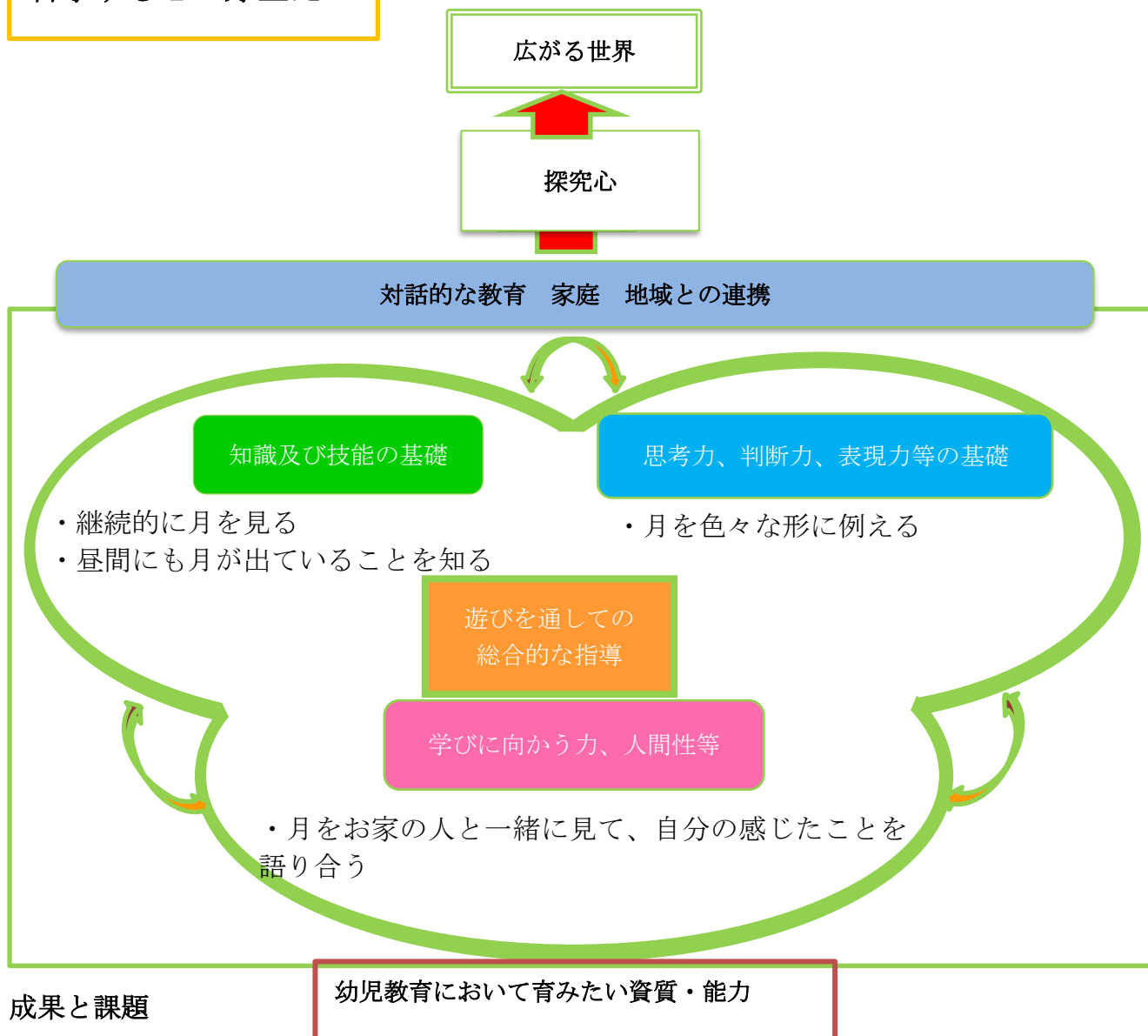
「科学する心」を窓口に保護者や友達と心を動かした温かい経験となる。

要因を探る

- ・光の遊び、七夕、5歳児に教えてもらった太陽と月、地球の関係が総合的に「月」への興味・関心につながっている。

- ・月の満ち欠け、クレーターを何かに見立てる、月が複数あるという幼児期ならではの発想が学びにつながっていることを職員はじめ、保護者もわかり、子どもと共に空に興味関心をもって空を見上げている。

科学する心の芽生え



保育者の援助と環境構成について

○少人数を強みととらえ、保育をすすめることができた。個別最適な学び方ができるように、どう学ばせたいかを保育者が主体的に考えることができた。

○物や事象への心が弾む出会い方を仕組み、柔軟に対応していくことで遊び（学び）の質がかわっていった。

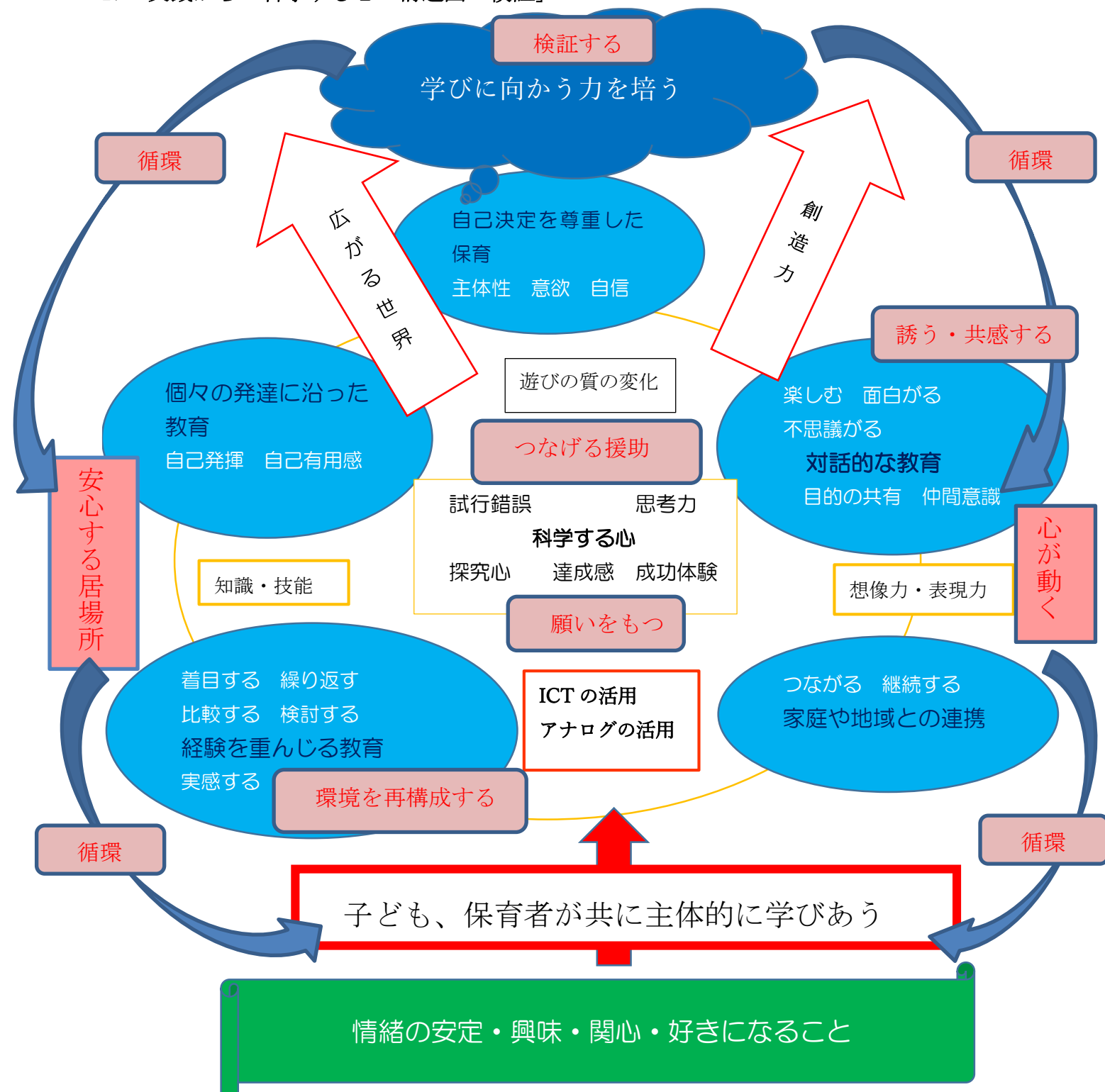
○年齢と時期を意識しすぎて、タブレットや大型テレビを使う機会を逃してしまった。4歳であるから、焦点化のために機器が必要な場面がある。心がときめくような使い方を2学期以降、実体験とのバランスを考えながら検討していく。

子どもの変容

○「科学する心」を育むポイントは「好きになること」と「学びによってつく力」の循環であることを確認した。入園当初、期待と不安の気持ちが入り混じっている子どもの、科学する心をくすぐることで、幼稚園が大好きな場所になり、最高の学びの場になっていった。また、子どもの変容ぶりを保護者も共に喜び、いい循環となっている。

○探究心旺盛な子どもについて保育者が理解をし、場を設定したことで自分や他者と対話することを喜びに感じ、他の場面（歌や律動など）でも堂々と一人でできるようになっていった。ひとつの自信が子どもの気持ちを支えていく。

IV 実践から「科学する心の構造図の検証」



おわりに

「科学する心」は教育の真ん中にある。「心にとまり、動き、もっとと目を輝かせて生活することは、幸せなことである。

見守りや認めだけに留まらず、どんな力をつけてほしいかを願い、保育を展開していくこと、一緒に面白がり、共に進めていくことは、決して保育者主導ではないことを確認し合えた。

子どもたちは安心して失敗できるから次も試してみようと思える。それがまさしく探究である。幼稚園という学びの場で自己肯定感が育まれた子どもは、一つの好きから世界が広がっていく。保育者は、子どもたちの個々の特性に応じながら、きっかけをつくり、夢中になっている場面を意味づけ、新たな目標をもって遊びこめるよう、共に主体で対話を大切にしたい存在でありたい。